

1 テーマ 文化、形式、音声を「感じ、考える」ことと交流をつなぐ活動の工夫  
— 小5 Lesson6「アルファベットを探そう」の実践を例に —

2 テーマ設定の理由

英語活動への取り組みの様子から、5年生児童は、英語の授業を楽しみにしており、英語そのものやアメリカを始めとする英語圏の文化に対する興味をもっていることが分かる。また、児童は、月に2回程度行われる、ALTを交えての授業をとっても楽しみしている。

しかし、実際に新しいフレーズや単語と出会うと、「何と言っているの」、「どう言えばいいの」などと、すぐに教師に尋ねることが多い。これは、英語を理解しようという気持ちの表れであると考えられるが、返せば、単に、意味が分かればよい、使えればよい、というように安直さを求める傾向があるとも言える。そして、そのことが進んだ交流を妨げていると推察される。

そこで、児童には、英語について、英語表現の背景にある「文化」、文字の形や語順などの「形(形式)」、発音やリズム、イントネーションなどの「音」に目を向けさせる必要があると考えた。そして、その視点から英語の特徴に目を向けたり、日本語と比較したりさせることによって、意味や用法を理解させると共に、英語に慣れ親しみ、進んで交流できるようにさせる必要があると考え、本テーマを設定した。

3 学習計画

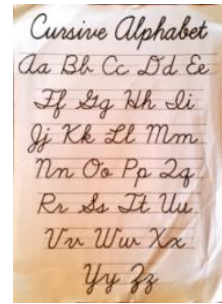
時	活動内容	形態
1	○ ALTから英語のアルファベットの成り立ちを聞き、実際の筆記に用いられる筆記体の紹介を受ける。 ・ 筆記体を書いてみる ・ 互いに形を見合う	個人 ペア
2	○ ブロック体(教科書)のアルファベットと、ALTから教わった筆記体のアルファベットの違いを考える。 ・ キーワードゲーム ・ ミッシングゲーム	ペア 全体
3	○ ブロック体のアルファベットの形や音に慣れ親しむ。 ・ チャンツ(○パン、ダズパン、ミックspan) ・ ステレオゲーム ・ 読み聞かせ(『I am going!』)	グループ 全体
4	○ ALTと共に筆記体でお気に入りのサインをデザインする。 ・ サインの読み方やデザインを紹介し合う	ペア
5	○ ブロック体のアルファベットの形や音に慣れ親しむ。 ・ チャンツ ・ ペアゲーム(What do you want?) ・ 読み聞かせ(『Let's Go for a Drive!』)	グループ ペア 全体
6	○ 友達とサイン会を行う。	全体

## 4 実践内容

### (1) 文化に慣れ親しむ活動の工夫

#### ア 筆記体を書いてみる活動

本来、英語活動で取り扱われるのは、ブロック体の大文字と小文字である。しかし、児童は既にローマ字を学んでおり、アルファベットそのものに関する興味は低い。その折、ALTより、筆記体の紹介の提案があった。そこで、この活動を導入として、ブロック体への興味を引き出すことを考えた。児童は、英語圏における筆記体の発達や現代の筆記体の特徴を紹介され、意欲的にその綴りを学んでいた。



<用意された手本>

#### イ サインのデザインを考える活動

筆記体のアルファベットを用いて、自分のサインをデザインする活動を行った。添削は、ALTによって行われ、児童はアルファベットの形を維持しながらも独特のサインを考えようと、意欲的に活動に取り組んでいた。この活動とブロック体の文字に慣れ親しむ活動とを接続することにより、文字の形に意識を向けて活動に取り組むことができた。



<デザインを工夫したサイン>

### (2) 形式や音声に着目する活動の工夫

#### ア 文字の形を考えながら行うチャンツの工夫

「ABCDソング」をチャンツとして取り入れた。そこでは、文字の形に閉じた部分がある場合に手を打つ「○パン」、濁った音がある場合に手を打つ「ダズパン」それらの両方で手を打つ「ミックスパン」などの条件を付け加えた。



その他、同時に発音された複数の英文字を聞き取るステレオゲームや、文字のヒントを得て物をあてるゲームも行った。

児童は、文字の形や音に意識を向けながら、楽しく交流していた。活動していた。



<考えるチャンツやゲーム>

#### イ 英語の音に慣れ親しむ読み聞かせの工夫

この單元では、簡単なフレーズで、英語の音やリズムを児童が感じられる絵本の読み聞かせを取り入れたいと考えた。そこ

で、Mo Willems『AN ELEPHANT & PIGGIE』シリーズを選んで、読み聞かせを行った。児童は、英語の音やリズムを楽しんでいた。



<英語の音やリズムを感じられる絵本を選定>

## 5 成果と課題

ALTの提案と結びつけて、英語の文化、形式、音声に着目させる活動を組み立てたことにより、それまで、受動的だった児童の、主体的に活動したり交流したりする姿を見ることができた。また、英語と日本語の違いを、文化、形式、音声という視点で比較して考える姿も見られるようになってきた。

しかし、このように主体的に考える活動は、定着にまでは至っていない。さらに、文化、形式、音声に着目するような活動を開発し、主体的で能動的な活動や交流のできる児童を育てていきたい。